

吃音の悩み知って

古里小 言語聴覚士招き授業



内藤さん(右)を交えてグループワークで意見を交わす児童

古里小学校の3年生約100人が13日、言葉がつかえたり、出にくくなったりする「吃音(きつおん)」について授業で学んだ。昨年に続き、県内外の前授業で吃音への理解を広めている言語聴覚

士に講師を依頼。児童は講話を聞いたり、グループで話し合ったりして、吃音がある人との関わり方を考えた。松本市内のクリニックに勤務する言語聴覚

士の内藤麻子さん(51)は、長野市内で吃音のある人の数について「統計上ではおよそ古里小6校分に当たる3800人。知らないだけでたくさんいることを

同小は、吃音のある児童の要望もあって昨年11月に別の学年で授

知って」と話した。「自分が嫌い」「生き返りたい」と吃音に悩む子供の声も映像で紹介し、「言葉に詰まらないようにすると余計に話しづらくなる。本人にとっては自然な話し方なので、きちんと話を聞いてあげてほしい」と伝えた。講話後は5人ほどのグループに分かれて吃音がある人との接し方を話し合い、「困っている人がいることが分かった」「話している時はちゃんと聞いてあげる」などと意見を出していた。

業を実施。今回は、3年生にも吃音のある児童がいることから、理解を促そうと計画した。